コラム 人・動物・動物園

思い出の動物たち（3）

～三平というサル～

小　松　　守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）

奥にしまい込んできた様々な思い出は年と共にぼやけたり、抜け落ちたりしている。長く動物と向き合ってきたから生死に関わる苦い思い出も多く、消えて欲しいと思うが、折に触れふと浮上してもくる。

一方で懸命に生きた動物たちは何かを主張するかのように感動的な思い出となり、誇張されながら鮮明に蘇ってくる。

今回は私に母性や愛について思いを巡らすきっかけをくれた、ノドジロオマキザル「三平」の思い出を紹介する。ディープな感覚漂う思い出だ。

ノドジロオマキザルは南米コロンビアあたりの熱帯雨林に生息する新世界ザル類の一種である。アフリカやユーラシア大陸で進化したヒトも含めた旧世界ザルとは区別されている。比較的知能が高く南米のチンパンジーとも称され、顔つきは個々で違って見える。それは個性とも言え、心の豊かさの表れかもしれない。

さて、このサルの飼育は大森山動物園で開園間もない昭和51年頃からずっと続いてきた。三平は大森山のノドジロオマキザルファミリーの元祖であり、鶏のヒヨコを育てたことでも話題になったサルだ。三平の生き方を思い出すたび、動物が失わずにきた「子育て」の本質とか原点とは何かを私は考え込んでしまう。その三平の顔、今でもはっきり目に浮かぶ。

三平の登場は偶然の出来事、巡り合わせで始まった。開園後間もない頃のこと、外国航路の船乗りさんが航海中飼育していた若い雄ザルを引き取って欲しいと園に持ち込んだ。初めて見るサルだったため種が分からず図鑑を開きノドジロオマキザルであることがわかり、珍しさもあり引き取ったのだ。

若い雄ザルは元気なく弱々しかった。長旅の影響で栄養も悪く治療が始められたが、一頭では寂しかろうと動物商を通じ仲間を探した。見つかったのが思い出のサル、雌の三平だった。雌なのに男名の三平になった理由は、動物園に入りたての新米獣医師の私が雌雄判定を雄と誤ったためで、その名はその後変えられることはなかった。

三平は若雄と仲良く暮らしたが、残念なことに若雄は間もなく亡くなった。今度は三平が独りぼっちになってしまった。当時飼育を担当した私は寂しそうな三平の気持ちを和らげたいと思い、給餌の時に彼女に話しかけるなど、時間をかけて世話をした。餌を差し出すと私を見ながら“ホォホォ”と声を発し喜び、手から餌を取ってくれた。三平の優しい仕草が印象的だった。

ある時、遊び心もあり寂しさ対策になればと思い、三平の部屋に鶏のヒヨコを入れてみた。三平がヒヨコにどう反応するか興味もあった。

三平の態度、行動は思いもよらないものだった。初対面のヒヨコに攻撃的に接するどころか指で優しく触れ、確かめ始めたのだ。そして、ヒヨコも三平の指を軽くツンツンと突き返した。まるでＳ.スピルバーグ監督の映画「Ｅ.Ｔ.」のポスターのシーン、地球外生命体と少年エリオットの交流のようで、異質な生き物同士が心を通

わせたような感動的なものだった。

三平の行動はさらに展開、なんとヒヨコを両手で柔らかく包み込み、自分の方に引き寄せたたのだった。「まさか」の驚きの光景だった。動物は普通、見知らぬ存在を外敵とみなし攻撃的態度にでるが、三平はまるで自分の赤子でも抱くように受け入れたのだ。

二匹の関係は坦々と続き、食事はそれぞれだが、食後休む時にはヒヨコは三平に寄り添い、寒い時は三平がヒヨコを抱き温めた。ヒヨコは心地よさに目を細めた。互いにぬくもり、安心を求め、心が満たされていたのかもしれない。

ある日、三平の部屋清掃の時、ヒヨコが水でぬれないように私がヒヨコを隅によせようと手を出すと、ふだんは攻撃的な態度を見せない三平が、眉間に皺をよせ、“キィキィ”と声を発し、歯をむき出して私を威嚇したのだ。「大事な私の子に手を出すんじゃない」と言わんばかりに。その凄まじさには圧倒された。ヒヨコは三平にとって自分の子、大事な仲間になっていたのだろう。

動物心理学の門外漢にはこの奇異で特異な二匹の関係性について専門的な分析はできないが、三平とヒヨコの双方が求めるものが合致し生まれたものなのだろう。求めるものとは、優しさ、ぬくもり感、安心感などか。三平の身体に沁み込んでいた、自分を頼って来る小さく、柔らかで暖かなものを守りたいという母性が触発され、この奇異な関係が始まったのかもしれない。三平の母性とは、三平自身が母から育ててもらった時の接触感覚、心地良い思い出などが下地になっていたのだろう。母から受け継いだ何かがヒヨコとの出会いで目覚めたのだろう。

異なる動物の間で生まれた関係性であるが、そこには弱いものを守る側と守られる側で紡ぎ合う生きてゆく上で大事な本質が見えてくるし、生命（いのち）をつなぎ生き続けるための巧妙な仕掛けにも重なってくる。その本質を失った場合、生命をつないでいくのは難しくなるに違いない。

二匹の関係はヒヨコの成長に合わせながら若鶏になっても続いた。雄若鶏を抱く三平の姿は奇異とも不思議とも言える光景だったが、どこか微笑ましいと同時に、その姿は母性とか動物の生命をつなぐ本質を見せていた。

三平とヒヨコとの関係は、三平が鶏を抱けなくなる物理的問題や鶏側の行動変化などで薄らぎ、やがて自然に消えていった。動物の子別れ、親が子を追い払う行為にも似る。自然の摂理であり、どこか人間っぽさを感じた。

鶏との関係を終えた三平はその後、「カリアゲ」と言う連れ合いを得て、やがて雌の子をもうけた。三平の子育ては実に愛情に満ちたものであったことは言わずもがなである。三平とカリアゲの相性は相思相愛とも表現できるすこぶるいい関係であった。夫婦間の毛づくろい、子育てを手伝うカリアゲ、睦まじい家族の姿があった。子を挟んで三平、カリアゲが「川の字」になって寝る姿はまさに人間家族と同じに思えた。

やがて三平の娘に子が生まれた時、三平は自分の子を抱きながら、娘の子も同時におんぶして孫育てまでするスーパー子育てを見せていた。まさに大森山動物園の名物母さんとも言え、日本一のノドジロファミリーをつくり上げたのだった。

そして三平最後のシーンも実にドラマチックだった。三平が何匹目かの子育て中のこと、何が原因か急性胃拡張に見舞われ、緊急手術が行われた時の事だった。抱かれていた子は麻酔のため離された。術後の麻酔覚醒時の意識朦朧とした中で取った三平の仕草は今でもはっきり目に焼き付いている。麻酔時に引き離された我が子を胸に抱き入れようとしていたのか、空中に両手を差し出し、何度も抱く仕草を見せたのだ。その行動の元は三平の身体に沁み込んでいた母性だったのか。あの光景は今も忘れられない。三平はこの病が元で帰ることはなかった。